

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 三浦 望

Narratological Function of the Disciples in the Fourth Gospel – Formation of the Implied Reader through the Narrative Perspective of the Disciples – (ヨハネ福音書における「弟子たち」の物語論的機能——弟子たちのナラティブ視点を通じての内的読者の形成——) と題された英文によるこの論文は、新約聖書正典福音書の一つである『ヨハネ福音書』の全体を対象に、語り (ナラティブ) の内部において「弟子たち」が果たす役割に焦点を当てて総合的に論究したものである。全体は3つの Part (以下「部」とする) からなり、そこに6つの Chapter (以下「章」) および4つの Excursus (以下「補論」) が配分されている。さらに結論と展望を総括が置かれ、冒頭には略語表、巻末には参考文献リストが配されている。以下、この構成に準じて全体の概要を記す。

2つの章と1つの補論からなる第1部は、第2部と第3部において展開される本格的な議論の基盤を準備するものである。第1章は、『ヨハネ福音書』における「弟子たち」というテーマへのイントロダクションであり、テーマの趣旨、研究史、研究目的が簡潔に記されている。同書において弟子たちに言及される箇所をまとめた表 (p.14) も付されており、この後、本論でどの箇所が具体的に問題となるのかを一覧することができる。続く第2章では、『ヨハネ福音書』の構成をレトリックないしナラトロジーの視点から——数多くの先行研究を参照しつつ——分析した結果が、やはり図表 (p.26) と共に提示される。この2つのステップを通して、『ヨハネ福音書』における「弟子たち」と「ナラトロジー」についてそれぞれ著者が前提する基本的な認識が示され、この2つを組み合わせる論文本体への導入となっている。

この直後に2つの補論が挿入される。第1の補論は、『ヨハネ福音書』の研究史、特にその方法論を総合的にまとめたものである。本論文において論理構成上必ずしも不可欠なものではないが、著者の意図するところをより広い研究地平から理解するために有益である。「第4福音書における神殿モチーフ」と題された第2の補論は、『ヨハネ福音書』研究において近年有力になっているテーマとその論点をまとめたものである。著者自身にも同じテーマを扱った論文があり (p.41 脚注1、英語版は本論文提出時点で未刊)、後に本論文でも関連する事柄が繰り返し扱われることから、参考としてこの箇所に挿入されている。

続く本論は、第1部で準備された前提にのっとり、『ヨハネ福音書』の「弟子たち」がナラトロジーの観点からどのような役割を帯びているのかを、弟子たちが登場するエピソードごとに、ギリシア語原文を提示しつつ詳細に分析していく。著者の一貫した判断は、論文タイトルにも表現されているように、読者が弟子たちを自らのモデルとして受け取ることによって、読者が作者の意図に沿った理想的な信徒へと「形成」されていく、逆にいえ

ば、そうした「物語論的な機能」を『ヨハネ福音書』の著者は「弟子たち」の形姿に託したというものである。

構成としては、『ヨハネ福音書』の前半（10章まで）が第2部第3章に、「橋渡し部」(Bridge-Section 11～12章)が第2部第4章に、後半にはいっていわゆる「告別説教」(13～17章)が第3部第5章に、受難・復活・顕現物語(18章以降)が第3部第6章に、それぞれ配分される。一見すると、こうした配列は機械的・無機的な羅列にすぎないように思われる。しかし著者は、福音書のストーリー展開に応じて、弟子たちの機能が変わっていくことを繰り返して指摘する。一例を挙げるなら、『ヨハネ福音書』に特徴的な「愛(まな)弟子」は福音書後半の13章になって初めて登場するが、これは偶然ではなく、福音書前半部までで暫定的に読者の中に形成された理想的弟子像を引き受け、読者をさらに高みへ、そして完全な信仰——「見ないで信じる」信仰——の獲得へまで導く、いわば上級ガイドの役割をこの「愛弟子」が負っているからなのだという。

第3章の後に第3補論が置かれている。これは『ヨハネ福音書』の中でも最もドラマチックなエピソードである福音書第9章の「盲人の癒し」物語をナラトロジーの観点から集中的に分析するものである。ここで、主要とはいえない登場人物(Minor Characters)とイエスとの間に成立する親密な関係が論じられ、この後に登場する愛弟子を部分的に先取りする機能があることが指摘される。また第4補論が第5章の直後に配されている。第2補論とも関連する内容であるが、「神の家族」(Familia Dei)という概念が著者によって提起され、これこそが『ヨハネ福音書』が示す理想的な信徒のあり方であるということが詳説される。またこの概念が、第6章で扱われる受難・復活・顕現のナラトロジー分析のキーワードとして利用されることになる。

以上が本論文の概要である。本論文の美点として審査委員会で合意をみたのは、とりわけて以下の諸点である。

テーマ設定がオリジナルであり、かつ有意義であること。『ヨハネ福音書』をナラトロジーの立場から研究することは学界における近年の流行であり、また福音書における「弟子たち」の役割という問題も、『ヨハネ福音書』に限らず、伝統的な研究テーマである。しかしながらこの2つを総合的に組み合わせた研究はこれまで見当たらない。なおかつ、このアプローチは既存の2つの流れ双方を引き受けて連続的に発展させたものでもあり、『ヨハネ福音書』のナラトロジー研究と弟子研究、それぞれ単独であれ、どちらへも積極的な貢献を果たすことができる。

肝心の論証については、個別のエピソードごと詳細に議論されるので、ここでいちいち要約することはできないが、おおむね説得的であると評価できる。とりわけ、神殿モチーフや「神の家族」という概念を用いて『ヨハネ福音書』の理想とする信徒共同体像を従来よりも具体的に規定することができたことは、学界への大きな寄与だといえる。また、弟子像が福音書のストーリー展開と共に役割を変化させられており、段階的に読者を導くようなナラティブ構造が確認できるということの指摘はきわめて刺激的で、また説得力があ

る。

また、著者は英語でこの論文を執筆したが、ナラトロジー等、いわゆる「メタ文学」の論述はどうしても煩雑になってしまうところ、母国語話者ではないにもかかわらず、複雑な議論を十分な明晰さと説得力をもって展開することに成功している。博士学位請求論文をあえて英語で執筆するという挑戦にここまで成功したことは、研究者として著者がすでに獲得している大きなアドバンテージを示している。

他方、審査委員からは以下のような欠点ないし問題点も指摘された。ただし、それぞれについて逆の意見ないし擁護意見も出された。以下に主要なものを列挙する。

古代の文献に現代の文芸理論を適用できるのかという問題。『ヨハネ福音書』は古代文献であり、その常の通り、「読者」はごく僅かで（しかもそれは「朗読者」であり）、このテキストに触れる人間は大部分が「聴者」ないし「聴き手」であった。それゆえ、テキストの同じ部分を繰り返し読む（読み聴かせてもらう）ことで文脈構造への理解を深めるとか、テキスト内で相当以上に離れた 2 箇所を比較して対応関係を確認するとか、そういう行為はほぼ不可能だったのではないか。とすると、一定以上の規模をもつテキストについてその内的一貫性を論じるということもできないのではないか。

これに対しては、文芸理論的なアプローチが古代文献に対してまったく無効だというのは極論であり（そもそも近現代の文学テキストも遡れば古代のそれを規範として成立したものである）、そして古代ならではの諸条件については、その都度、可能な限りで顧慮するという方法が生産的かつ現実的であろうという意見が出された。委員会全体としては、将来的な課題として、こうした方向のさらばる検討を著者に求めたいという意見で一致した。

次の点。本論文は「内的著者」「内的読者」という言葉を多用する。これは実在した生身の人間としての「歴史的」な著者や読者をあえて考慮せず、テキストそのものだけに語らせる、テキストだけに基づいて議論するというナラトロジーの方法論に基づくものである。が、とりわけ『ヨハネ福音書』などの古代宗教文献は、最低限、それがいつ頃どのような歴史的状況で書かれたものかを考慮しなければ、ほとんど理解不可能なのではないかという疑念が出された。たとえば「ユダヤ人」という言葉が『ヨハネ福音書』ではイエスの敵役として繰り返し登場するが、「ユダヤ人」とはそもそも何かという説明がテキスト内部に見出されるわけではない。

これに対しては、原理的にはその通りであるけれども、テキストそのものに語らせるというアプローチそのものの意義がそれで全く失われるわけではないという指摘がなされた。

「ユダヤ人」についての客観的・歴史的な説明は福音書テキストに記されていない。しかし「ユダヤ人」がこの福音書においてどのような価値判断を伴うレッテルとして使われているのかは、福音書テキストそのものの内部に判断根拠を求めるしかない。「内的」な著者／読者と「歴史的」な著者／読者を、どちらに偏ることもなく有機的かつ十全に組み合わせた議論を構築できるならばそれが理想だが、容易に実現できるものではない。ただ著者には、本研究で得られた成果を、今後少しずつであれ、現実の歴史の中へ描き戻していく

作業にも取り組んでほしい、という意見が委員から出された。

最後に、言語および形式上の不備について。前述のようにポジティブな評価が出来る一方で、やはり著者が英語のネイティブスピーカーではないことからくると思われる語学的な不自然さが散見されるという意見があった。本論文を英文の学術書として正式に出版する際にはネイティブチェックを確実に受けるようにという指示が委員より出された。また本論文が多用する図や表について、その番号づけが不自然で参照しづらいこと、目次と本文中で章節のタイトルが一致しない箇所が見られること、等々の指摘があり、修正が求められた。

以上のように、本論文は、わずかな不足は認められるも、それが論旨そのものを損なっているわけではなく、独創的かつ有意義な研究としての価値を十分に認定することができるという点において委員会の判断は一致した。よって、論文提出者について、本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。